

大阪くらしの今昔館所蔵品を巡る

大坂画壇の絵師たち

5. 五井金水

大阪くらしの今昔館には近世の大坂画壇の絵師による作品が所蔵されています。
それらの中から注目すべき作品を紹介していきます。

江戸時代に天下の台所といわれた大坂は、運河が網の目のようにはりめぐらされ、40万人が住む大都会でした。季節感の失われがちな大都会の中で、人々は祭りや年中行事に季節の移り変わりを感じ、都会ならではの四季を楽しみました。今回はそうした大坂の名所と行事を描く作品を紹介します。

五井金水「浪速勝景帖」 絹本着色 1帖50面 各23.0×21.0cm

名所旧跡に乏しいと思われがちな大坂も、江戸時代には松川半山・西山芳園などにより、さまざまな名所絵が作られています。大坂名所絵の特色は、水の都らしく水景の多いこと、繁華な通りや有名な店舗など都市景が多いこと、そして祭りや遊楽など賑やかな場面が多いことなどが挙げられます。安政5年(1858)、日英修好通商条約の締結のために、イギリス外交団が来日しました。その一員であったローレンス・オリファントはおもしろいことを書いています。彼によれば江戸はロンドン、

京都はローマ、大坂はパリに相当する都市であるということです。江戸は政治都市、京都は宗教都市であるのに対し、大坂は「もっとも有名な劇場やもっともぜいたくな茶屋、もっとも広い庭園がある。そこは奢侈と富裕の地であり、また快楽と遊興に時を費やそうとしてくる当世風の日本人の遊び場所である」というのです(『エルギン卿遣日使節録』雄松堂書店)。大坂は商業都市であると同時に、新しい文化と娯楽が渦巻く一大遊興都市だったのです。本図には大坂の名所と、都市のさまざま

な娯楽が、季節感豊かに描かれています。絵師は明治時代に大阪で活躍した五井金水(1879~?)。本名を松次郎といい、久保田桃水、中川蘆日らに画を学び、四条派の山水花鳥を得意としました。本図は西山芳園の「大坂名所図」を参照しながら、独自の場面を付け加えています。近代に描かれたため、維新後に奉行所跡に作られた谷町官舎など、近代化を示す貴重な風景もあります。変わりゆく町を見ながら、金水は懐旧の思いをこめて描いたのでしょう。(岩間 香 摂南大学教授)



天神祭
船渡御を迎える氏子町はお迎え船を仕立てた。船の屋根を飾る「お迎え人形」は、それぞれの町のシンボルであった。



天満宮
道真公が愛でた梅の花が咲きほころぶ境内。江戸中期に西山宗因が中興した連歌所があり、大坂の遊芸の一拠点であった。



合邦ヶ辻
四天王寺に近い三叉路にあった閻魔堂。石の閻魔像が子供を睨む。もっともこの像は「なで肩」で権威が無く、役にたたぬ諭えにされた。



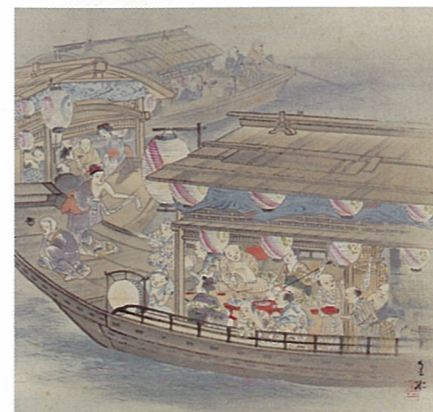
高麗橋虎屋
虎屋の饅頭は全国に知られた銘菓であった。普通、一個三文の饅頭が虎屋は五文。それでも日に数万個が売れたという。「饅頭切手」という商品券も好評だった。



道頓堀
太左衛門橋の向こうは宗右衛門町。角の芝居小屋に櫓がたつ。堀に面した芝居茶屋には、舟から直接あがることのできた。



さらえ講
本来は琴、三味線、踊りなどの発表会の意。大坂では有料の演芸もあり、秋によく行われた。



大川漁火
夏の夜は涼み舟が一番。明るいつ提灯に照らされて、飲めや歌えの大騒ぎ。片肌脱ぎの女、女装の男があやしげな踊りで盛り上げる。



谷町官舎
大坂城の周囲には奉行所などの幕府組織があったが、明治以降、府のものとなった。洋風の白い官舎は近代化の象徴であった。



八軒家
天神橋と天満橋の間にある、大坂でもっとも賑やかな船着き場。伏見と大坂を結ぶ過書船や、野崎参りなどの小廻り船が発着した。八軒の旅籠があったのでこの名がある。

くら話 見どころ

大阪くらしの今昔館が設計段階からこだわった展示の中身や、ふだんは気づかない展示の裏側をご紹介します。

「ゆらぐ電球」

江戸時代の浪花の町を再現したフロアを「なにわ町家の歳時記」と名付けました。これまでさまざまなイベントや季節に準じた展示替えを行ってきました。夏休みいっぱいまでは、大阪を代表する「天神祭」の町風情となっています。今回は「明かり」のひみつを紹介しましょう。現代に生きるわれわれの生活には、なくてはならない電気。明治30年代を待たないと大阪では一般家庭まで普及しませんでした。当然のことながら、再現した江戸時代の町の暮らしは、明かりに限って言えばろうそくもしくは菜種油を使用していました。行灯などの灯火具に灯を灯せば、炎は自然とゆらぎ風によって消えもしたのです。

さて展示室でこの明かりが再現できるのか。ろうそく・菜種油の照度はいったいどれ

くらいあるのか測ってみることにしました。実験の結果、いくら頑張っても5ルクスが限界であることが判明。手元の文字がなんとか読める程度。これを本気で再現したら展示室は真っ暗になってしまいます。当然のことながら、火事も心配。当たり前のことながら炎の色に近い裸電球を採用し、十分な照度を確保するのが博物館では常識。さらに資料の劣化を防ぐために紫外線と赤外線をカットするためのフィルターを使用。

しかし、何とも不自然。つきっぱなしの裸電球はなんとも情けない。もっと自然な明かりにならないのか、担当学芸員と製作者の膝をつめた話し合いが続きました。

そこで考えだしたのが、電流の強弱で炎のゆらぎが作れないか。それも単なるプログラムではなく、ひとつひとつの電球勝手に



単独でゆらぎ、自然に見えないものか。

そして、携帯電話に使用されている小さなマイクを転用し、音に反応する装置を採用しました。携帯電話のマイクは高音には反応しにくく、低音をよくひろいます。その特性を利用して実験してみました。これがなんと大正解。人の話し声、足音や演出の音に見事に反応してくれます。しかし、入音すると電流値が上がる設定では自然な雰囲気になりませんでした。何となくお化けが出てきそうなのです。そこで逆転の発想。電流値を下げてみたら何ともいい雰囲気なのです。ぜひ一度ご覧ください。なかなかの「ゆらぎ」です。

(学芸員 明珍健二)